

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

反発させる前に共感しよう (1)

山田先生はある時、同僚から田中君の問題行動のことで相談されました。

放課後、同じクラスの佐藤さんが公園の鉄棒で遊んでいました。すると、田中君が佐藤さんに向けて石を投げ、当たりそうになったそうです。翌日、佐藤さんは担任にそのことを伝えました。田中君は石を投げたことは認めたのですが、わざとやったのではないと言い張り、佐藤さんに謝ろうとしません。

1 認識の明確化

山田先生は田中君の担任ではないので、会話をする機会はそれほど多くはありません。

山田先生は生徒指導室に田中君を呼んで話を聞くことにしました。担任以外の先生から呼び出しを受けた田中君は何を言われるのか、どんな指導をされるのかと不安そうです。

先生は椅子に座るよう促します。向かい合って座ると事情聴取のような感じになるので、互いが直角になるように着席します。そして、穏やかな表情で話しかけます。

Q1

先生は開口一番何を言いますか。

- ① 石を投げたんだって？
- ② 呼ばれた理由がわかるかな？
- ③ 悪さをしたんだって？

①のように先生が聞けば、子どもは「ハイ」と素直に答えます。なぜかという、やったかど

うかの二者択一、事実の確認をしているからです。石を投げたことは担任も承知しています。今さらごまかしても、事実はすぐにわかります。

しかし、素直に返事をした後、子どもは先生が発する次の言葉を予想します。

「なんで石を投げたんだ」

「石を投げたら危ないだろう」
とお説教が待っていることを覚悟し、身構えます。防壁の姿勢に入ってしまう。

また、③のように聞かれると、子どもは心を閉ざしたくなります。

山田先生は、確かに田中君がたびたび問題行動を起こすことを知っています。そのために「悪さをしたんだって？」と決めつけがちです。「またやったのか。いつもおまえは悪いことばかりするな」と言外でレッテルを貼っています。

先生のそんな気持ちも田中君は敏感に察知します。そして、「どうせ、ほくのことなんか……」と山田先生を拒絶します。

先生は、自分が悪い子だと決めつけている、何を言っても聞く耳を持たないと諦めの境地になります。

子どもにも言い分があります。でも、「また悪さをしたのか」と決めつけられては先生に心を聞く気にはなれません。新しい事実や、何か隠していることがあるのではないかと疑われているようにも取れます。

これでは、教師の方から信頼関係を断ってしまうようなものです。

②のように聞かれると、初めは何を答えていいのか躊躇します。石を投げたことなのか。怪我をさせそうになったことなのか。それとも、

担任の先生に反抗的な態度を取り、反省していないと思われたことなのか。

子どもは先生の顔を伺いながら言葉を選びます。先生がどんな言葉を期待しているのかを考えます。

この状態は教師のほうが優位です。このように子どもを指導する時は、教師が主導権を握ることが大事です。

また、なぜ呼ばれたのかを回答させることにより、田中君が問題行動を振り返ることになり、言葉に出させることで子どもの悪しき行動の性質を取ることができず。つまり、自分の非を認めることになりません。



さらに、時間の短縮にもなります。

例えば、電話で問い合わせをすると、「担当者に代わります」と保留にされることがあります。しばらくすると担当者につながるのですが、「(用件は?)と再度聞かれます。電話を最初に受けた人に用件を告げたのだから、保留の間にそれが担当者にも伝わっていると思っていたのに、[また同じことを話さなければならぬ]と少々ウンザリした気分です。説明するのは辟易します。同じことを何度も説明するのは辟易します。

最初に子どもに「何が悪かったのか」を話させることで、すぐに本題に入れます。教師は事

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？

一般的には①のように聞きがちです。
「なぜ」に対する回答は多様です。そのため、子どもは何と答えていいのか迷ってしまいます。選択肢が広いが故に、どのように言えばよ

Q2
子どもが自分の悪さに気づく問
いかけはどちらでしょう。

①なぜ投げたの？
②どこに投げたの？

子どもが石を投げ、友達にそれが当たりそうになったことを確認しました。
さて、いよいよ本格的な指導開始です。まずは、指導の理想像を決めます。「石を投げて危ない思いをさせてごめんさい」と、佐藤さんに謝罪させることです。
それを達成するためのベビーステップ（小さな一歩）を踏まえたシナリオを作ります。

2 気持ちよりも行動を問う

「同じ土俵に立つ」という言葉があります。教師と子どもが同じ認識をもつことが大事です。認識の食い違いがあると状況判断を間違ってしまうことになりま

いのか悩んでしまうのです。
仮に迂闊なことを言って先生の怒りに火をつけることになっては「やぶへび」です。
そこで、子どもは押し黙る行動をとります。先生は、「なんで黙っているんだ。石を投げた理由をちゃんと言いなさい」と催促します。それでも子どもが黙っていると、さらに先生は強い口調で催促します。
催促を繰り返すたびに先生の口調はきつくなり、声を荒らげてしまうのです。
また、「なぜ」には、過去についての否定的な要素が含まれます。
「なぜ石を投げたんだ（危ないだろう！）」
「なぜ石を投げる（ような悪いことをした）んだ」
「なぜ石を投げるんだ（事の善悪もつけられないのか！）」
このように、責められた気分になります。責められると、人は自分の身を守りたくくなります。「だって……」と自分を正当化しなくなります。言い訳をした時点で自分の行為を正しいと思うようになりま

ところが、先生からは「言い訳をするな」と一喝されます。さらに、「石を投げて、友達を危ない目にあわせておきながら反省してない」とさらに評価を下げられてしまいます。
「石を投げた」「友達を危ない目にあわせた」という二つのことでしかられていたのに、言い訳をしたために「君は全くわかっていない。反省していない」と重ねてしかられることになるのです。
石を投げたのは昨日です。過去のことは終わ

ったことです。その時の心境を思い出せというのは無理です。
その点、②の問いの回答は限定されます。田中君は悩まなくてすみます。
「なぜ」は感情に訴える問いですが、「どこ」は、事実をたずねる問いです。限定された回答すればよいので、田中君の心の負担は軽くなります。
「どこ」という問いは、反省とは無縁のような気がしますが、田中君の行動を振り返らせるきっかけになります。自分が何をしていたのかという事実を思い出させます。
田中君は「鉄棒の支柱に投げた」と言います。ということは、支柱を的にした「的当て」をしていたということ

紙幅が尽きました。結局、先生が設定した理想像どおりに田中君は佐藤さんへ謝罪するのですが、続きの指導については次号へ……。

